

【原 著】

看護学生における喫煙の知識に関する調査

川 根 博 司*

【要 旨】

日本赤十字広島看護大学の平成12年度（2000年）の新入生139人において、喫煙に関する知識について調査した。平成12年12月に実施した「医療の本質」の定期試験の際に、喫煙の知識を尋ねる小テストを一緒に行った。小テストの問題は平成12年の第94回医師国家試験に出題されたものを利用した。内容は問1, 2はわが国の喫煙状況, 問3は受動喫煙, 問4はタバコの煙の成分, 問5は喫煙の急性影響についてであった。問1～問5の正解率はそれぞれ51.8%, 79.9%, 61.9%, 66.2%, 28.1%であり、全問正解者はわずか7人（5.0%）しかいなかった。大学1年生の喫煙に関する知識だけでなく、基礎学力も不足しているが示唆される。今後は正規の授業として喫煙と健康の問題について教えるつもりである。

【キーワード】喫煙, 看護学生, 知識, 教育

はじめに

将来の医療従事者を目指して大学を受験する学生は、健康と病気への関心度が高いことが望まれる。すなわち、医師や看護婦（士）になるため医科大学や看護大学に入学する学生は、健康問題に関する基本的知識が備わっていることが期待される。筆者らは川崎医科大学の新入生において喫煙に関する知識について調査し、喫煙の健康への影響を知らない者が多いことをすでに報告した（川根, 松島, 2000）。しかし、看護学生におけるこのような喫煙の知識に関しての調査報告は、調べたかぎりでは見当たらなかった。そこで今回、筆者は平成12年4月に新しく開学した日本赤十字広島看護大学の1年生に対して、喫煙に関する知識についての簡単なテストを行い、その調査結果に若干の考察を加えたので報告する。

対象と方法

平成12年（2000年）度に日本赤十字広島看護大学へ入学した1年生141人のうち139人を対象にした。方法は平成12年12月に実施した「医療の本質」（医学概論）の定期試験の際に、喫煙に関する知識を尋ねる5問からなる小テストを一緒に行った。定期試

験は10月～11月に90分7コマの講義を行ったあと、単位認定のため実施した。喫煙に関する小テストには平成12年の第94回医師国家試験に出されたものを利用した（表1）。なお、「医療の本質」の授業中に喫煙問題について触れたこともあったが、今回の小テスト問題や解答を直接は教えていない。また、学生たちにはこのような形で調査結果を公表することは周知してある。

表1 喫煙に関する知識を調べるための小テスト

	正しいものに○, 誤っているものに×をつけなさい。
問1	我が国の成人男性の喫煙率は漸減傾向にある。
問2	我が国の20歳代の女性の喫煙率は増加傾向にある。
問3	受動喫煙の影響を防止するため分煙対策がとられる。
問4	たばこの煙は一酸化炭素を含む。
問5	喫煙の急性影響として血圧が低下する。

結 果

各問題の正解率をみると（表2）、わが国の男性の喫煙状況を述べた問1は51.8%、若い女性の喫煙状況を述べた問2は79.9%であり、受動喫煙についての問3は61.9%であった。タバコの煙の成分、

* 日本赤十字広島看護大学 kawane@jrchen.ac.jp

喫煙の急性影響を尋ねた問4, 問5の正解率はそれぞれ66.2%, 28.1%であった。問1～4は過半数が正解しており、特に問2については8割の学生が正しく答えていた。全問正解者はわずか7人(5.0%)しかいなかった。

表2 各問に対する正解者数(率)

問1	72人(51.8%)
問2	111人(79.9%)
問3	86人(61.9%)
問4	92人(66.2%)
問5	39人(28.1%)
問1～問5	7人(5.0%)

考 察

当看護大学の1年生を対象にして、喫煙に関する知識について簡単なテストを行った。小テストに利用した問題は、平成12年の第94回医師国家試験問題・B・99であり、元米は5つのうちから誤りを1つ選ぶ五肢択一問題であった。問1～3は公衆衛生学、問4, 5は薬理学、生理学に関連する問題といえる。しかしながら、これらの問題は医学部卒業生でなくても、あるいは医学の専門教育を受けていなくても解けるように思われる。

問1～3の答えはいずれも○であるが、日頃から新聞やテレビで社会ニュースを見聞きしておれば、比較的簡単にわかることであろう。わが国の男女の喫煙状況に関する問1, 問2については、正解率がそれぞれ約5割, 8割と問2の方が高かった。これは若い女性の喫煙が増えていることは日常生活でよく経験されるのに対して、男性の喫煙率が低下してきていることはあまり目立たないためかもしれない。川崎医科大学の新入生における同様の調査では、問1の正解率は26.5%だったので、当大学1年生の方が約2倍高かったことになる。受動喫煙に関する問3の答えを間違った4割近くの学生は分煙対策という言葉の意味がわからなかったのであろうか。川崎医科大学の場合は問2, 問3の正解率はそれぞれ95.1%, 75.5%であり、当大学学生の成績の方が少し悪かった。

問4については、植物(この場合タバコ)が燃えると一酸化炭素が発生することは一般常識に属する現象であり、当然正しい。問5は×であり、喫煙の急性影響として血圧が上昇するということは、タバコの煙に含まれるニコチンの作用をまず理解しておかねばならない。実はこれも義務教育で教わること

になっている内容であり、中学校用の保健指導の手引(日本学校保健会, 1991)をみると、タバコ喫煙の心臓・血管系機能に及ぼす影響が述べられている。そこには、タバコを吸うとただちに血圧が上昇し、心拍数が増加し、指先の皮膚温も徐々に低下するデータが示してある。すなわち、問4, 問5はいずれも大学受験生であれば知っておくべき科学的事実といえる。

当大学の1年生において、タバコの煙に一酸化炭素が含まれていることを知らない者が約1/3もいたこと、喫煙の急性影響については約7割が知らなかったということは、以前の筆者らの調査結果からある程度予想されたこととはいえ、やはり残念な成績であった。また、全問正解した者は7人(5.0%)しかいなかったのも同様である。ちなみに、川崎医科大学の新入生オリエンテーション時における調査では、問4, 問5の正解率はそれぞれ60.8%, 27.5%であり、全問正解率は2.9%であった。今回の当大学での調査は後期に実施した点が違っているが、同じテスト問題に対して医学生も看護学生もほぼ似たような成績であったのが興味深い。両大学とも全国から学生が集まってきており、わが国の大学1年生において喫煙に関する知識だけでなく、基礎学力も不足していることが示唆される。小中高校での喫煙防止教育というよりも、日本の理科教育を見直す必要があると思われる。

看護学生における喫煙の知識を医師国家試験問題を利用して検討したものは今までないが、看護学生の喫煙行動や喫煙に対する態度についてはいくつかの報告がみられる(岡田, 1993; 三徳, 三吉, 星, 蓑輪, 1998; 大井田, 他, 1998, 2000)。大井田ら(1998)は看護学生の喫煙関連疾患に関する知識についても調べ、正解率が肺癌や喉頭癌は高いものの、他の部位の癌や循環器疾患では低いことを示した。厚生省の「平成10年度喫煙と健康問題に関する実態調査」において、疾患によっては国民のタバコの健康影響に関する認識がかなり低いことがわかっており、喫煙の健康影響に関する知識には偏りがあるといえる。米国ではタバコ依存に関するカリキュラムとして、医学教育で取り上げるべき項目の指針が示されており、基礎医学領域ではタバコと発癌性、喫煙関連疾患、受動喫煙の影響、タバコに含まれる有害物質、ニコチン依存の病態生理などが含まれているという(武田, 佐藤, 高橋, 大塚, 関沢, 2000)。新入生オリエンテーションにおいて喫煙と健康に関する講話を行うことは有意義であるので(川根, 松島, 2000)、看護・医療技術系大学では入学時に少

なくとも一度はタバコに関する正しい情報提供がなされるべきであろう。以上のことを踏まえて、筆者は次年度から「医療の本質」の講義の1コマを使い、喫煙と健康の問題について正規に教えるつもりである。当大学の看護学生が保健医療の本質を理解して、自らタバコを吸わないというライフスタイルを選択するとともに、将来は患者の禁煙支援ができるような看護婦・士になってくれることを望む。

文 献

- 川根博司, 松島敏春 (2000). 医師国家試験問題を
利用した医大新入生における喫煙の知識に関する
調査. 川崎医学会誌, 26 (3), 135-137.
- 三徳和子, 三古凡夫, 星 融, 箕輪眞澄 (1998).
専門学校生徒に対する禁煙教育の効果. 保健婦雑
誌, 54 (7), 564-568.
- 日本学校保健会, 編 (1991). 中学校 喫煙・飲酒・
薬物乱用防止に関する保健指導の手引 (pp.44-
47). 東京, 第一法規出版.
- 大井田 隆, 尾崎米厚, 岡田加奈子, 望月友美子,
杉江拓也, 河原和夫, 川口 毅, 箕輪眞澄 (1998).
看護学生、新人看護婦の喫煙行動関連要因. 学校
保健研究, 40 (4), 332-340.
- 大井田 隆, 曾根智史, 望月友美子, 正林督章, 城
戸尚治, 丸山美知子 (2000). 薬学部および看護
学部女子人生における喫煙行動と喫煙に対する態
度の比較. 厚生指標, 47 (6), 18-21.
- 岡田加奈子 (1993). 一般学生と看護学生の喫煙行
動と禁煙教育. 帝京平成短期大学紀要, 3, 55-
62.
- 武田裕子, 佐藤浩昭, 高橋秀人, 大塚盛男, 関沢清
久 (2000). 医学生の喫煙習慣と卒前教育におけ
る課題.
- 日本胸部臨床, 59 (12), 913-920.

Knowledge of Smoking among First-Year Students in a Nursing College

Hiroshi KAWANE*

Abstract:

A survey of knowledge of smoking among first-year students at the Japanese Red Cross Hiroshima College of Nursing was carried out in December, 2000. A total of 139 freshmen in the year 2000 class took a written test asking about knowledge of smoking. It was modified from one of the questions from the 94th national examination for medical practitioners given in March, 2000. The questions consisted of five matters ; the first two of which were concerning present smoking status in Japan, the third, passive smoking, the fourth, constituents of tobacco smoke, and the last, the acute effect of smoking. The percentage of students answering each question correctly was 51.8%, 79.9%, 61.9%, 66.2%, and 28.1%, respectively. Only 7 students (5.0%) answered all questions correctly. The results showed poor knowledge of smoking among the nursing students. It is suggested that giving a lecture on smoking and health at the orientation meeting for first-year students is needed.

Keywords:

Smoking, Nursing students, Knowledge, Education

* The Japanese Red Cross Hiroshima College of Nursing